



## 日本図書館研究会 第4回国際図書館学セミナー 開催のお知らせ

当研究会では、昨秋の上海でのセミナーに引き続き、今年は日本・京都にて、中国より4名の図書館員をお招きして開催することになりました。両国のライブラリアンシップの相互理解と発展のために、ぜひご参加ください。

- 日時 : 2005年10月23日(日)13時開会 - 24日(月)17時30分閉会  
 会場 : 京都市上京区 同志社大学寒梅館 地下大ホール  
 (地下鉄「今出川」下車、烏丸通りを北へ約4分)  
 参加費 : 会員(日図研)2000円 非会員 2500円 学生 1000円  
 申し込み : 10月15日までに(1)メール (2)FAX (3)はがき のいずれかの方法で、  
 下記宛てにく氏名、所属、住所、TEL、懇親交流会参加の有無をご記入  
 のうえお申し込みください。

柳 勝文 (国際交流委員会受付担当)  
 〒602-0843 京都市上京区中筋通り石薬師下ル新夷町 390  
 TEL/FAX : 075-241-4668 E-mail : ks050002@mail.doshisha.ac.jp

- ◆ なお、懇親交流会費は5500円で、当日会場受け付けでお支払いください。  
 セミナーに関する、ご不明な点など、担当理事 渡辺信一 (TEL/FAX : 075-492-5372)  
 にご照会ください。

\*日本図書館研究会より掲載依頼がありましたのでお知らせいたします。

### [目次]

日本図書館研究会 第4回国際図書館学セミナー開催のお知らせ	...	1
支部委員挨拶	...	2
図書館小断 新米図書館員日記～寄贈とお金の話～	...	4

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール : [dtkk@rg7.so-net.ne.jp](mailto:dtkk@rg7.so-net.ne.jp) (大学図書館問題研究会京都支部)

URL : <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

## 支部委員挨拶

今年度、以下の10名が支部委員を務めさせていただきます。10名全員より、簡単なご挨拶させていただきます。

### ■赤澤 久弥 (支部報編集 / 組織・財政)

今年度、支部報の編集と組織・財政を担当させていただきます。

さて現在、「情報の発信」は、誰でも、インターネット上で、簡単にできるようになっています。そうした中であって、支部報は、情報発信の場としては、ささやかなものかもしれません。けれど、毎号、京都支部の皆さまのお手元に届く支部報は、顔の見える「交流の場」として、ネットとは別の役割を持てるものなのかもしれません。そして、皆さまには、そうした支部報を「情報を発信する場」として、お気軽に活用していただければ、と思っております。

京都支部報では、大学図書館に関する話題を中心に、日頃お考えのこと、イベント参加の感想、見学の報告、本の紹介などなど、いつでも皆さまの投稿をお待ちしております。

どうぞ今年度もよろしくお願いいたします。

あかざわ ひさや (滋賀医科大学附属図書館)

### ■池田 貴儀 (研究企画)

皆様はじめまして、今年度から支部委員として京都支部の活動に参加させていただくことになりました池田貴儀と申します。図書館勤務2年目のまだ右も左もわからぬ新米ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

いけだ きよし (日本原子力研究所情報メディアライブラリー)

### ■井上 敏宏 (支部報編集)

引き続き、支部報編集を担当させていただくことになりました奈良先端科学技術大学院大学の井上です。編集といってもわずかな部分だけで、大変な部分は他の方にお任せしっぱなしです。申し訳ない次第です。ともかく、出来る限りのことはさせていただきますので、何卒よろしくお願いいたします。

昨年4月に京都から奈良に出向になり、ようやく慣れたかと思ったら、今年4月にまた課内異動で電子化の部署へ。目まぐるしい限りです。学生時代、絵画を専攻していたにもかかわらず、この夏はじめてルーブル美術館へ足を運びました。やっぱり、絵画は現物の前に立たないと・・・。

いのうえ としひろ (奈良先端科学技術大学院大学附属図書館)

## ■大館 和郎 (支部長)

昔から、数種類の本を平行して読む癖があったが、最近ますますひどくなっている。異なる主題がクロスオーバーするところに関心が向き、もはや乱反射といった状態に近い。ところがこういう状態に対し、松岡正剛は「編集とは、関係の発見である」というコンセプトで見事な料理さばきを見せている。彼の書評が掲載されている Web サイト『千夜千冊』  
 <<http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya.html>>はその実践だ。ならば図書館は、「関係が発見されることを助ける場（装置）」とってよいのではないか。

おおだて かずお (京都学園大学図書館)

## ■大綱 浩一 (HP と ML)

支部委員 2 年目を務めます京都大学附属図書館の大綱です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。支部委員も 2 年目ともなりますと、なにかと新鮮みに欠けがちですが、過去に学び、現在を捉え、未来を築くべく、しっかりと課題を持って努めたいと思いますので、どうぞお力添えをお願ひ申し上げます。

おおつな こういち (京都大学附属図書館)

## ■進藤 達郎 (メールマガジン)

滋賀大学の進藤です。昨年度に引き続き、支部委員として活動させていただくことになりました。今年度は、大図研京都支部のメーリングリスト yurikamome 上で配信しておりますメールマガジンの担当として、支部活動の状況や耳寄りな企画など、みなさまのお役に立つ情報を定期的にお届けできるようがんばります。どうぞよろしくお願ひいたします。

しんとう たつろう (滋賀大学附属図書館教育学部分館)

## ■辰野 直子 (支部報編集 / 支部報印刷と発送)

支部報の編集、印刷と発送を担当させていただきます。会員の皆様には、日々慌しく、京都支部の活動に触れるのは支部報ぐらいという方もおられるかもしれません。読みごたえある紙面づくり、そして(当然の事ではあります)確実に皆様のお手元にお届けする事を心掛けます。ご要望がございましたら、お気軽にお知らせください。今年度もどうぞ宜しくお願ひ致します。

たつの なおこ (京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館)

## ■呑海 沙織 (研究企画 / 組織・財政)

今年度も研究企画と財務・組織を担当させていただくことになりました呑海です。よろしくお願ひ申し上げます。今年度は見学など、どなたでも気軽にご参加いただけそうなイベントを計画中です。みなさまのご参加、心よりお待ちしております。

どんかい さおり (奈良女子大学附属図書館)

## ■若松 克尚 (研究企画)

大図研京都支部の皆様、はじめまして。2005年度支部委員を努めさせていただきます、若松克尚です。就職を機に京都の地に来て、わずか一年足らずですが、活動に参加させていただくことになりました。至らぬ点など、多々あるかと思いますが、暖かく見守りつつ、ご指導のほどよろしくお願ひいたします。

わかまつ かつひさ (京都造形芸術大学芸術文化情報センター)

## ■渡邊 伸彦 (研究企画 / 組織・財政)

今年も京都支部の支部委員をやらせていただくことになりました。よろしくお願ひ致します。昨年度は支部委員一年生で、財務と企画の担当で色々なことを学ばせていただきました。今年もそれを生かして、つなげていきたいと思ひます。

ところで、私の最近の一番の関心事は COOL BIZ 実施です。確かにここ数年の夏の最高気温の上昇ぶりは目を見張るものがありますが、まさか着衣に関してまで「勧め」があるとは思ひもよりませんでした。はっきり「こうしなさい」という指示もなかったため、大して流行りもしないだろうとタカを括ってネクタイスタイルを通していたのですが、気がつけば結構浸透しているという噂。環境省のサイト見れば着こなしのポイントとして

- ・ノーネクタイ時のシャツは、襟元がしっかり立つタイプを
- ・アンダーウェアへの配慮もお忘れなく

とのアドバイスまでいただける手厚い配慮ぶり。周りを見回せば、事務の人まですっかり涼しげな姿で、完全に乗り遅れてしまいました。今年には悔しいので、このままネクタイをし続けるでしょうが、はたして来年の俺はどうするのでしょうか？

・・・はあ、新しいシャツ買いに行くの面倒だなあ・・・

わたなべ のぶひこ (京都大学文学研究科図書館)

## 図書館小断

## 新米図書館員日記～寄贈とお金の話～

寵猫 (ペンネーム)

「なあ、この寄贈の評価額、ちょっと高くないか？」

きっかけは、係長のそんな何気ない一言でした。

私の普段の仕事は購入図書の入力で、寄贈図書の受入担当は別にいます。ただ、春先という時期は予算執行の出足が悪く、図書の購入もなかなかないため、手隙になることが多いのです。そこで年中間断なく仕事がある寄贈受入の仕事を手伝ったりします。普段のお金に関わる仕事とはちょっと違うので、割と気楽に受入作業をこなしていました。

そんな半ば気の抜けた時に、突然係長から声をかけられたので、思わず声がうわずってしまったくらいです。

「え？そ、そうですか？」

「おう。なんとなく、そんな気がしただけなんやけどな」

「は、はあ。一応、基準を元に出しているつもりなんですが……………」

「うん。せやろうな。ああ、別にええねん。ほんまに、なんとなく、そんな気がしただけやから」  
それだけ言うと、さっさと自分の席に戻ってしまう係長。

「……………」

寄贈の図書を受け入れるときには「評価額〇〇円」と決めてから処理をします。これは後で「うちの図書館(大学)の財産が〇〇円増えた」という報告書を書かなくてはならないので、その時に役に立えます。購入の場合は「〇〇円で買った」で済むのですが、寄贈は大抵無料でもらうので、評価額を決めなくてははいけません。

私が寄贈の担当者から教えられたときは「定価が判ればそれ、判らなければ算定法を使って」とのことでした。算定法は「ページ数」「分野」「サイズ」「資料種別」などから計算できるようになっています。私はそれで評価額を算定し、受入の処理をしていました。もちろん、その額が適当かどうかなど、考えたこともありません。しかし、一度引っかかってしまうと、どうにも気になってしまうのが人間というもの。ここは先輩の寄贈担当者に聞いてみることにしました。

「田中さん(寄贈の担当者)、この評価額の算定法って、ちょっと高めに設定されているんですか？」

「へ？そんなことないわよ。なんで？」

そこで、先ほどの係長とのやりとりを、かくかくしかじか。

「ああ、なるほどね。んー、でもあたしはそんなに高いとも思わないけど。こんなもんじゃないの？」

「うーん、そうですかねえ……………」

そう言われると、なんだかそんな気もしてくるから、困ったものです。しかも、やっぱりどうもイマイチはっきりしない。はっきりしたのは、「適切な評価額」というものがよく判っていない、ということだけ。でも、これ以上誰に聞いていいかも判りません。仕方ないので、藁にもすがる思いで google 様にお問い合わせしてみますが、これまたびったりくるような内容がヒットせず。どうも手軽には調べられそうにない感触にやる気が萎えるのを感じつつ、基本に立ち返って、いわゆる文献に求めることにしました。試しに論文を見てみると、意外にもそのものズバリの記事(事例報告)があり、びっくり。それに機嫌を良くし、本にも当たってみますが、さすがにこちらはそのものズバリの本はなく、考えた末、図書館業務の叢書で資料組織関係の部分を中心に見ていくと、いくらか近い内容を見つけることができました。

「で、どうだったの？」

「え？な、何のことですか？」

「評価額の話よ。しばらく調べてたでしょ？なんか成果はあったの？」

「いや、それが……………」

当初、他の図書館の評価額算定基準と比較してみれば、とにかく私のところの基準がどの程度かがわかるだろう、と安易に考えていました。しかし、どうやらその基準自体があまり外部に公開されていない、という事実と直面させられたのです。しかも、それが何故なのかということ自体、理由がわからないという始末。結局、具体的な数字に出会えたのはたったの2つの大学図書館だけでした。1つは私のところと似て、定価を基準にし、不明なものは「ページ数」「資料種別」「和洋」などから計算できるようにしていました。もう1つの大学の方は、その種別大小に関わらず一律〇〇円としていました。さらにその大学の、一律の評価額を適用する前は、当該年の購入図書平均額

を和洋別に一律価額として適用していたようです。まさに組織によって千差万別なのではないかと予想させるような結果でした。そう、とても、知りたかった「額の適切さ」などというところまで、いけなかったのです。

「なるほどねー。まあ、結局、よくわからなかったのね」

「はい、まさにその通りで」

「まあ、そんなものでしょうね。大抵、あたしたちはあまり高額でない図書しか扱わないし、実際、その評価額を気にする寄贈者もないからね。でも、昔のアメリカとかだったら、寄贈行為はその寄贈者の所得控除とも関係していたから、図書館はその評価に関するポリシーとかには慎重だったのよ。下手にテキトーな評価額なんか出しちゃって、それを後で何かの根拠にされちゃったらたまらない、ってとこかしら」

「そうか、言われてみれば確かに。じゃあ、日本の図書館があんまり評価額の基準を出してないのも、そういうことに関係があるんですかね？」

「さあ？知らない」

ガクッと崩れ落ちる、私。

「あはは。あたしもそんな調査をしたことがあるわけじゃないしね。でも、そうかもしれないし、そうじゃない、もっと別の理由があるのかもしれない。そーゆーことよ。もしまだ興味があるんだったら、ゆっくり腰をすえて、ちゃんと調べてみたらいいじゃない？まだ若いんだから、もしかしたら、これからその手のことに詳しい人に会おう機会だってあるかもしれないわよ？」

「なるほど、確かにそうですね」

「そうそう。まあ、なんにしても、そーゆー日常の疑問を大事にするのは、大切なことよ。これからも精進しなさい」

そういうと、未熟者を揶揄する年長者のように（いや、実際そうなのだが）ニヤニヤ笑った。

「へーい」私もちよっと悔しくて、不承不承という返事をする。

「じゃ、精進ついでに、一昨日届いた寄贈の山、処理しといてねー」

「え！？なんですかっ、それ！？」

「だって、あたし、可愛い後輩の指導に忙しくて、とても手が回らなかったんですもの。それに明日から友人の結婚式に出席するから、三日間有休取るしー」

仕方ないわよねー？とばかりににっこり笑う。

…………絶対、最初から押し付けるつもりだったに違いない。だって、今朝だって、事務の人と「最近ヒマだわー」とかいいながら、お茶していたのを知ってるし。

「あ、係長にはちゃんと言ってあるからー」そういうと、係長のほうを向く。私もそっちを向くと、ちょうどこっちに気がついたのか、「大丈夫、全てわかっているから」とでも書いてありそうな笑顔で大きく頷いた。

「……………ハイ、ガンバリマス」

「よしよし」と満足げに頷くと、自分のデスクに帰っていった彼女を見送りながら、今度は「先輩が押し付けてくる仕事を笑顔でかわす方法」を調べよっかなー、などと考えるのでした。

※この「小噺」は、実話を基にフィクションをまじえて構成したものです。

かまどねこ（ペンネーム）